

第162号

平成15年3月

E-mail : © 2003
 shimz@mb.infoweb.ne.jp
 LDG04167@nifty.ne.jp

SCだより

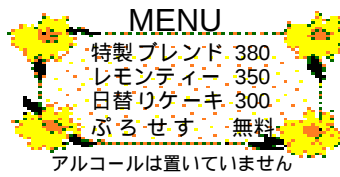
編集 発行 人

清水 吉男

(株) システムクリエイツ
 横浜市緑区中山町 869-9
 電話/FAX 045-933-0379



27回め



今年は花粉症がなかなか収まらなくて辛い。昨年
 の場合は、1ヶ月程で慣れたが、今年はま
 だくしゃみが止まらない。客がドアを開けるた
 びに外の空気が入ってくるが、商売をやっている
 以上、こればかりはどうしようもない。

ところで、CMMの取り組みが、広がりを見せ
 ている中で、店に来る客の中に疑問を感じてい
 るエンジニアも少なくない。

昨年は、大手の銀行のシステム統合に失敗し
 た。今年は、大きな失敗には至っていないが、
 やはり小さなミスが発覚している。先頃は、航
 空関係のソフトウェアの修正ミスが相次いで、
 空港が混乱した。この他に、ニュースにこそな
 らないが、計画とは程遠い結果になっている事
 例も多いようだ。そのようなトラブルに関係し
 たソフト会社の中には、何らかの「CMM」の
 レベルに到達している組織を持っていると思わ
 れる会社もあるのに。

「いらっしゃい。おや、しばらく顔をみません
 でしたね」

時々来る客であるが、今回は3週間 
 ほど開いたように思う。

「やっと、プロジェクトが一段落
 したので、今日は早く帰ろうと思って」
 「あなた達も年度末に間に合わせるように頑
 張ったんですか」

「いえ、本当は1月末に終わる予定のプロジ
 ェクトだったんだけど、終わってみると2ヶ月遅
 れてしまった」

「早く終わるような作戦でも立てましたか？」
 「はい、うちでも来年度にはCMM導入に取り
 組むように社長から言われているので、試し
 に、要件管理とかプロジェクト計画や進捗管理
 を取り入れてみたんだけど」

「少しCMMを研究されたんですね」
 「CMMのセミナーに出たり、社内でも研究会
 がスタートして、そこでCMMの解釈を進めて
 いるので、KPAの中で幾つか理解できたところ
 から実際のプロジェクトに取り入れてみよう
 というわけです」

「なかなかいい姿勢じゃないですか」
 「何とかしないと、このままじゃ行き詰まっ
 てしまうと、みんな思っているんですよ」

今日は、厚みのあるカップに出来立てのコー
 ヒーを入れてみた。このカップは、店に来る客
 が趣味で焼いたものだ。5年前に定年を前倒し
 してリタイアした後、陶芸教室に通って習っ
 ていた人が、最近是个展を開くまでになった。こ
 れはその時の作品だといって置いてあった。

「さっきの話では、結果は思ったようには行か
 なかったということですか？」
 「そうなんです。終わってみると前とあまり変
 わっていないんです。だから、中にはCMMの

熱が冷めている人もいます」

「あなたも？」

「正直、それに近いです。でも社長から言わ
 れているし」

「CMMの導入の動機が不純だと、うまくい
 かないからね。きちんとした目的を設定するこ
 とが大事だよ。たしか『日経コンピュータ』(*)の
 最新号(2003.3.24)に乗松氏の記事が載って
 いたけど、読んだか」

「いえ、まだ読んでいません。それどころじゃ
 なかったですから」

「じゃ、ぜひ読んでみて。CMMIについての
 記事だけど、導入の問題などは共通しているか
 ら役に立つよ」

「分かりました。会社にあるはずですから、明
 日、探してみます」

「いって、コーヒーをすった。」

「さっき、“要件管理”に取り組んでみた
 と聞いたね」

「はい」

「どういふふうに取り組んだのかな？」

「どういふふうになって、要求仕様書を何度かレ
 ビューしましたし、ベースラインの設定もやり
 ました。追跡もやったし、その後の仕様の変更
 も、窓口の担当者を置いて関係者でレビューし
 てから取り入れるということもやりました」

「それで、どうになりましたか？」

「仕様がなかなかまとまらず、ベースラインの
 設定もできない状況だったので、2週間ぐらい
 遅れたところで強引に設定しました」

「そのやり方でうまくいかな？」

「たしかに、その後の仕様変更が結構多くて、
 レビューが大変でした」

「それでも、最後まで変更に対する検討はやっ
 たというのは偉いじゃないの」

「うーん、彼は苦笑いしながら、 

「でも、何か変なんですよ」

「変って、何が？」

「これじゃ、楽にならないじゃないですか。仕
 様モレのバグだって結構出たし、要件
 管理のメリットが感じられないのです」

「やっぱりね。あなた達は、何か勘違いしてい
 ないかね。CMMの要件管理に取り組めば、要
 求仕様がスムーズにまとまって、仕様の変更
 も、仕様関係のバグも減ってくれると思ってい
 るのかい？」

「そうじゃないんですか？」と怪訝そうな顔で
 言った

「要件管理のどこにそのような効果があると思
 うかね」

「事前にレビューをしました」

「オーケー、そこでどれぐらい仕様のモレや矛
 盾が指摘されたかね」

「合計で30項目ぐらいです」

「30項目ね。それはソフト

ウェアの規模からいって多い
 と言える件数かな？」

「いいえ、ほんの僅かな件数です」

「要求仕様書のフォームや構成については何か
 工夫しましたか？」

「いいえ、特にしていません」

「なるほど。つまり、あなた達は今までと同じ
 ように要求仕様を書いておいて、レビューで問
 題が発見されることを期待したようだが、それ
 は根拠のない期待だね。確かに、設計に入っ
 てからの仕様変更についてはきちんとレビュー
 したようで、そこでの被害は押さえることがで
 きたかも知れないがね。それ以上の効果が上が
 る取り組みはしていないと思うが」

「だめですかね」

「だめじゃないんだよ。あなた達が取り組んだ
 要件管理は、たぶんきちんと取り組めたのだと
 思う。でも、それだけでは仕様モレや仕様間の
 矛盾などを防ぐことはできない」

「となると、CMMのレベル2にはまだまだ届
 かないということですか」

やっぱり、この人たちもCMMに対

する認識が間違っているようだ。 

「そうじゃない。あなた達が、CMMのKPA
 に沿って取り組んでいることがその部門全体で
 の行動であれば、CMMのレベル2は達成して
 いると判定されるだろう。でも、そのことと仕
 様モレなどのバグが減ることとは、必ずしも一
 致するわけではないんだよ」

「CMMのレベル2に達してもバグは減らない
 のですか？」

「あなたも結構短絡思考だね。CMMのレベル
 2でのKPAは管理プロセスの改善であって、
管理プロセスに関係したバグは減るだろう。で
 もバグには、要件定義や要件分析、さらには設
 計などの**エンジニアリング・プロセスに関する
 バグ**もある。実際にはこの方が多いだろう。C
 MMのレベル2に到達したとしても、エンジニ
 アリング・プロセスが改善されていなければ、
 バグは以前とあまり変わらないかも」

「じゃ、CMMは意味がないのですか？」

もう、この人の短絡思考は治らないのかも、と
 思いながら

「バグを一気に減らすのであれば、**要件開発や
 プロセスの設計**に取り組む必要がある。でもこ
 れだけでは、たとえ一部のチームで上手くでき
 たとしても、組織の中に広がることはないし、
 標準というものも作れない。それにはCMMが
 必要になる」

「つまり、両方必要ってことですか」

「そうだね。CMMは“前提となる幾つかの技
 術”と一体になることで、一層の効果を得るこ
 とができるんだよ」

「ということは、CMMのレベル2に達したと
 いても、必ずしも仕様モレなどのバグは防げ
 ていないかも知れないってこと？」

「そう。CMMのレベルに到達している組織で
 も、ニュースになったようなトラブルを防げな
 かったかも知れないってことだね」

「じゃ、このソフト会社はCMMのレベル2だ
 3だとしても、それだけではQCDをミート
 させる能力をもっているかどうかは分らない
 ってことですね」

* 日経コンピュータ 2003.3.24には、この他にも
 CMMIに関連した記事が載っています

何らかの形で、事前に要件開発やプロセスの設計
 に取り組んでおくことで、CMMの導入の効果を
 上げることができる

暁鐘の音

145

「愛国心」を求める前に

文部科学省が進めている教育基本法の見直し作業の中で「国を愛する心」を盛り込むという。ある意味では当然の話である。それを今になって取り上げるということは、文部省（当時）は戦後の教育の中で「国を愛する心」を涵養する教育を行ってこなかったということである。

一体、戦後の教育の中でどのような考えで教育してきたのか。「自由」や「平等」という考え方については、その内容が間違っているとしても、初等教育の中で教えてきか、「国を愛する」ということは、特に教えられていない。私自身もその記憶はない。かといって「国を憎め」と教えられたわけでもない。わざわざ「国を愛する」という意味を教えられなかっただけだ。

「国を愛する」というのは、いったいどういうことか。別に日本という国の風土を愛せよというのではない。戦前には「国体」という概念があったし、政治の仕組みがそれを裏付けていたのだ。「国を愛する」というときの「国」のイメージは明確だった。だが敗戦後、すでに「国体」の概念はない。今回も、愛する

対象として「国」という抽象概念を持ちだしてはいるが、結局は、その時の「政治」を愛せよと言つことになる。

国民が自国を愛する気持ちはどこから生まれてくるのか。人は、生まれてくる国を選ぶことはできない。たまたま日本に生まれたが、善良な国民である限り、その「国」が自分たちを守ってくれる、という思いがあつて、はじめてその国を愛する気持ちが生まれてくる。

「国」が自分たちを守ってくれるという前提があればこそ、他国の侵略に対して身をもつて国を守るうとするのである。時には子孫のために身を犠牲にする。その前提さえあれば、わざわざ「国を愛する」教育なんかしなくても、国民は喜んで国を愛するだろうし、そのために必要な税金であれば進んで「納める」だろう。ただし、長く他国の統治を受けた経験もなく、国を追われた経験もない日本人には、この感情は曖昧かも知れない。

今の日本は、医療費の高騰を押さえるために、患者側に自制させるといふ方法をとった。そのため、年老いて病気になるたときにお金がなければ診察も受けられない状態だ。わずかな年金から家賃や光熱費を差し引くと、一日五〇〇円以下で生活しなければならぬ老人が沢山いる。そんな中で、「一

割負担」の実施は、老人にとって生きること苦痛を与えるだけだ。

ホームレスに対しても、まるで「あなた達が悪い」とでも言うかのよう、何の対応もとられていない。一部のNPOが救援活動をしていることで、逆に行政は知らん顔だ。このような実態を見せられてもこの国を愛せよというのか。

長引く不況で仕事を失ったたんに、せっかく手に入れたマイホームのローンが払えない。かといって資産価値が下がった状態では手放すこともままならず、結局命を絶つていく。国民に「マイホーム」を持つことを煽つておいて、払えなくなったら命と引き換えで許してあげます（と契約書に書いてある）、という国を愛せよというのか。

若者の失業率が高いのは、文部科学省が時代に合わない教育を実施してきたことが原因なのに、そんなことは放置されたまま「国を愛せよ」という。一方で、既得権者が仕事がないと政治家に泣きつけば、公共事業という名目で「予算」から金を回す仕組みを作り上げ、その中で官僚と一緒に政治家が私腹を肥やしている国を愛せよというのか。

自分の娘をストーカーから守ってくれなかった警察が、裁判になった途端に、まるで「敵対」するかのよう態度に出たのを国民は見ている。そしてこのことに対して、国民を守るはずの政府（特に警視総監）が何らの対応もしないような国を愛せよというのか。

わざわざ「国を愛する心」などと

言わなくても、年金や健康に対する最後の不安を解消し、金にまみれた政治の腐敗を一掃し、利権に群がる政治家や官僚を排除し、警察機構が善良な国民を守ってくれば、国民の誰もが日本という「国を愛する」だろうし、そのような大人を見ていれば、子供達で自分の生まれた国に誇りを持つ気持ちは自然と身に付くはずだ。その上で、小学校で「国を愛する心」を教えるのなら、素直に受け入れられる。

やるべきことをやらないで「国を愛する教育」というのでは、順序が逆で

ある。いったい、そこにどんな魂胆があるのか。たしかに、「私は日本を愛します」「私は日本のために命を捧げます」と小学生の時から毎日言い続けられ、六、七年も教育すればほとんど誰でも洗脳できる。文部科学省が求めている「国を愛する心」というのはこれなのか。これではイラクや北朝鮮と同じになってしまわないか。

政治と行政が身を粉にして「国民の生命と財産を守る」ことに尽力しないかぎり、「国を愛する教育」は、むなし響きにしか聞こえない。

今月の一言

「我れはまさに人の長処を視るべし。人の短処を視ることなかれ。短処を視れば、則ち我れ彼れに勝り。我れに於て益無し。長処を視れば、則ち彼れ我れに勝り、我れに於て益有り」（「言志四録」佐藤一斎）

日本では「人の長所を見る」ということは、多くの人にとって苦手なのかもしれない。どうしても「人の短所」を見ようとする。それによって優越感に浸れるからかも知れない。だがそれでは進歩しない。

レビュー（ウォークスルー）によって、人（チームのメンバー）が書いた成果物の中に潜む欠陥（つまり間違い）を見つけてあげるやり方がある。自分ではなかなか見つからない欠陥を探すのに大きな効果がある。一般に早期に発見できずにテストまで持ち込めば、時には七倍もの時間がかかると言われている。

この時、注意しないと失うものがあることに多くの人は気付いて

いない。人の成果物の欠陥を発見したということは、発見者にとつては既に解決していることであり、成果物の作者も、指摘によって訂正することができるが、それだけでは、必ずしも次回に同じようなミスをおささないスキルを手に入れたとは限らない。

それよりも問題なのは、欠陥を指摘した人は、そこに「学ぶもの」を見つけていないかも知れないということである。それは、他の人の成果物の中に、自分よりも優れているところを見つける姿勢からしか手に入らない。

もし組織の誰も、他の人から優れた点を見つけないとなら、組織全体が停滞してしまふ。それが今の日本かも知れない。